道徳の時間の指導における７つの創意工夫（小学校）

解説書　第５章　道徳の時間の指導　　第３節　学習指導の多様な展開

※「小学校学習指導要領解説・道徳編」P.87～89より。

３　道徳の時間に生かす指導方法の工夫

道徳の時間に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを効果的に達成するには，児童の感性や知的な興味などに訴え，児童が問題意識をもち，意欲的に考え，主体的に話し合うことができるように，ねらい，児童の実態,資料や学習指導過程などに応じて，最も適切な指導方法を選択し,工夫して生かすことが必要である。

そのためには，教師自らが多様な指導方法を理解し，身に付けておくとともに，指導に際しては，児童による学習がより効果的に生み出されるように，児童の発達の段階などをとらえ，指導方法を吟味した上で生かすことが重要である。指導方法の工夫の例としては，次のようなものがあげられる。

⑴　資料を提示する工夫

資料提示の方法としては，教師による読み聞かせが一般に行われる。その際，例えば，紙芝居のように提示したり，影絵，紙人形などを生かして劇のようにして提示したり，音声や音楽の効果を生かしたりする工夫などが考えられる。そのことが，特に低学年などでは理解の手助けとなる。また,ビデオなどの映像も,提示する内容を事前に吟味した上で生かすことによって効果が高められる。

なお，多くの情報を提示することが必ずしも効果的だとは言えず，選り抜かれた情報の提示が想像を膨らませる上で効果的な場合もあることに留意する。

⑵　発問の工夫

教師による発問は，児童の思考や話合いを深める重要な鍵になる。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され，多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも，児童の意識の流れを予想し，それに沿った発問や，考える必然性や切実感のある発問，自由な思考を促す発問などを心掛けることが大切である。その際，授業での発問は重要なものに絞られていくことになる。

発問を構成する場合には，授業のねらいに強くかかわる中心的な発問をまず考え，次にそれを生かすためにその前後の発問を考え，全体を一体的にとらえるようにするという手順が有効な場合が多い。その中で,児童が自ら問いを発したり,学級に問題を提起したりするようなこともあってよい。

⑶　話合いの工夫

話合いは，児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり，道徳の時間においても重要な役割を果たす。意見を出し合う，まとめる，比較する，決めるなどの目的に応じて効果的に話合いが行われるよう工夫する。座席の配置を工夫したり，討議形式で進めたり，グループやペアによる話合いを取り入れたりするなどの工夫も望まれる。また，名札の活用，同じ考えをもつ児童同士が集まるように座席の移動を行うことなどによる一人一人の立場を明確にした話合いも効果的である。

その際，教師が話合いの全体を調整したり，それを進行したりする役割も重要であるが，児童の話合いの能力の高まりとともに，児童相互に聞き合い，討論することができるように工夫することが大切である。

⑷　書く活動の工夫

書く活動は，児童が自ら考えを深めたり，整理したりする機会として，重要な役割をもつ。この活動においては，必要な時間を確保することで，児童は自分のもつ速さ等でじっくりと考えることができる。また，学習の中で個別化を図り，児童の感じ方や考え方をとらえ，個別指導を進める重要な機会にもなる。さらに，一冊に綴じられたノートなどを活用することによって，児童の学習を継続的に深めていくことができ，心の成長の記録として活用することもできる。

⑸　表現活動の工夫

児童が表現する活動の方法としては，発表したり書いたりすることの他に，児童に特定の役割を与えて即興的に演技する工夫，動きやせりふの真似をして理解を深める工夫，音楽，動作，表情などで自分の考えを表現する工夫などがよく試みられる。低学年では，児童が人形やペープサートなどを手に持って演ずることも効果的である。さらに，実際の場面の追体験，実験や観察，調査等による表現物を伴った学習活動も実感的な理解につながり，効果的である。

⑹　板書を生かす工夫

道徳の時間は学級で黒板を生かして行うことが多く，板書は児童にとって思考を深める重要な手がかりとなる。板書は教師の伝えたい内容を示したり，その順序や構造を示したり，内容の補足や補強をしたりするなど，多様な機能をもっている。

その機能を生かすために重要なことは，思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく，違いや多様さを対比的，構造的に示す工夫，中心部分を浮き立たせる工夫などを凝らすことである。特に低学年においては，黒板を劇の舞台のようにして生かすことなども考えられる。また，教師が児童の考えを取り入れ，児童と共に作っていくような創造的な板書となるように心掛けることも大切である。

⑺　説話の工夫

説話とは，教師の体験や願い，あることについての感じ方や考え方などを語ったり，日常の生活問題，新聞，雑誌，テレビなどで取り上げられた問題などを盛り込んで話したりすることによって，ねらいの根底にある道徳的価値を一層主体的に考えられるようにしようとするものである。教師が意図をもってまとまった話をすることは，児童が思考を一層深めたり，考えを整理したりするのに効果的である。

教師が自らを語ることによって児童との信頼関係が増すとともに，教師の人間性がにじみでる説話は，児童の心情に訴え，深い感銘を与えることができる。

（※上記の下線及び太字化部分は、子どもの学習を促す観点から注目したい表現。）